

スイスメイドの誇り

ウイルソン・トロロンボーン

誇り高きマイスターたちの手によって  
丹精込めて製作された  
シンフォニック・トロロンボーン



# 太く柔らかい音と ROTAXの吹きやすさ…

「手作りによる精巧さを感じさせて、さすがスイス・メイドだと！」

ROTAX ロータリーの開発元として知られるスイスのウィルソンが生み出した  
高度に洗練されたトロンボーン。その魅力を語り合う……。

記事協賛：株式会社 グローバル

## 対談

トロンボーン奏者

今込 治

Osamu Imagome

元NHK交響楽団首席トロンボーン奏者

栗田雅勝

Masakatsu Kurita



——ウィルソンのトロンボーンと言ってもまだまだ知らない人が多いようですが、決して新しい楽器ではありません。  
栗田 ウィルソンは日本ではユーフォニアムだけが知られていますけど、昔から管楽器全般を作っているメーカーです。僕がこのトロンボーンを使い出したのも5年やそこらの話じゃなく、もう10年くらいは経っていて、N響にいた後半の頃はオケではウィルソン、カルテットではXOをずっと使っていました。5年前、僕にとつてN響で最後となったヨーロッパ公演（マラー1交響曲第6番）でもウィルソンでした。  
今込 僕はウィルソンを吹き始めて約4年です。もう少し息が入る楽器が欲しいと

栗田雅勝  
1956年岡山県生まれ。1975年東京藝大入学。伊藤清、クルト・ブチケ両氏に師事。1980年ドイツのハンブルクでホルスト・ラーシュ氏に師事。同年ベルリン国立音大に入学しヴォルフガング・ハーゲン氏に師事。ベルリン・ドイツオペラの契約団員として演奏する一方、ベルリン放送響にも出演。1982年に帰国後、東京トロンボーン四重奏団の結成に参加。1989年NHK交響楽団入団、首席として2016年まで在籍、2021年まで契約団員として同団で演奏を続けた。2005年にジャパン・エックスオー・トロンボーンカルテットを結成。東京音楽大学教授、洗足学園音楽大学客員教授、上野学園大学客員教授。

——ウィルソンを試してみたらとても良くて、とくに赤ベルの音色感を気に入って使い始めました。  
栗田 何度も改良を重ねて、今の形になっ

栗田 何度も改良を重ねて、今の形になっ  
ています。最初に吹いた楽器は全然違っ  
た。ちよつとユーフォニアムチックとい  
うか、ぼわーんとした音で……  
今込 軽い音だったんですか？  
栗田 その反対。柔らかさはあるんだけ  
ど、トロンボーンらしくないというか。  
——どのように改良を？



「僕がN響にいた後半の頃は、オーケストラではウィルソン、カルテットではXOをずっと使っていました」(栗田)

栗田 僕も含めて日本のトロンボーン奏者の多くは、太く、柔らかく、明るく、艶のある音で、音がバンと前に出てくれるような楽器を理想としていると思う。でも、昔の楽器はそうじゃなくて、わりと硬い音の楽器が多かった。トロンボーンは直管の楽器のせいもあるけど、どうしても音が硬くなりやすい。それで、もう少し柔らかさが欲しいと、僕の師匠にあたる世代の人たちはみんなコーンを吹くようになったわけです。コーンは柔らかくて明るい音がします。でも、そこからさらにみんなバックに変わって行ったわけです。

当時のコーンとバックの決定的な違い

は、音の太さですね。柔らかくて明るい音の中に太さが加わった。それでみんながバックを吹くようになったわけですが、ウィルソンの場合は、いま言ったような流れを逆に辿るようにして改良して行ったんです。元々音は太く、柔らかいだけども、そこにピーンとした直管的な響きをもっと加えたい。要するに、太くて柔らかい音をいかにまとめて行くか、という方向で改良が進んで行きました。細くて硬い音を、太く柔らかくしていくという話がよくあります。でも、ウィルソンはその逆でした。

——具体的にどこを改良して行ったん

ですか？

栗田 支柱の形や位置、ベルの厚みを変えらるなどのことが多かったですね。スライドは最初から問題を感じなかった。技術者がとても優秀で、どんどん良くなって行くんですよ。この形になったときにN響で試したら、ブレンド感も何も見違えるほど良く感じたのを覚えてます。

Wilson  
手作りによる精巧さ！

——今込さんはウィルソンのどこを気に入られて？

今込 一番は、スムーズに吹けることですね。たぶんロタックス(ROTA X)のロータリーが吹きやすいんだと。XOトロンボーンもロタックスが付いてますよね。

栗田 XO開発者の拜藤さん(拜藤耕一氏)が、ロタックスを付けた最初の(日本市場での)モデルを売らだそうと頑張ったにもかかわらず、数ヶ月違いで他社に先取りされ

てしまった。拜藤さんが凄く悔しがったのを覚えています。それだけロタックスは良いロータリーで、僕も最初に吹いた時から気に入りました。

——やはり息の入りやすさが？

今込 ノーマルのロータリーより息の通り道のカーブが滑らかになるのでスムーズに吹けるんでしょうね。

栗田 でも、スカスカに息が入るような感じでもない。ロタックスは程良い抵抗感があり、僕には一番自然に感じられます。

——ウィルソンは精密工業が発達したスイスのメーカーですね。

栗田 それもあるのか、とにかく作りがきれいなんです。メーカーによってはバリが残ったり、センターがずれてたりするものもあるんですが、そうした雑さが全然ない。しかもオートメーション的な精巧さではなく、手作りによる精巧さを感じさせて、さすがスイス・メイドだと。塗装ひとつとっても、普通のラッカー仕上げとは違





## Willson Trombone

TA411LYB ..... ¥693,000 (税込)

ベル：8½インチ、イエローブラス (ハンドハンマードワンピース)  
ボアサイズ：13.89mm  
スライド：イエローブラス  
スライド先端：イエローブラス  
メインチューニング管：イエローブラス  
オリジナル・ロタックスバルブ搭載、デタッチャブルマウスパイプ

TA411LRB ..... ¥715,000 (税込)

ベル：8½インチ、ゴールドブラス (ハンドハンマードワンピース)  
ボアサイズ：13.89mm  
スライド：イエローブラス  
スライド先端：ニッケルシルバー  
メインチューニング管：イエローブラス  
オリジナル・ロタックスバルブ搭載、デタッチャブルマウスパイプ

※両モデルともセミハードケース付



▲ウィルソンが生み出したロタックスバルブシステム。空気の流れを限りなくゼロに近づけ、ロータリーポートを構内することで理想に近い空気の流れが得られ、同時に小型軽量化によって素早いバルブアクションを実現した。



▲抜差管に溝をつけることでグリスを塗ってもはみ出さない構造になっている。



▲スライド外管の入り口に段差を付けることで、内管を挿入しやすくしてある。

「あまり息圧をかけなくても音が拡がってくれるのと、音の艶やかさと音の濃さから、僕は赤ベルを選びました」(今込)

います。時間をかけて自然乾燥させていると聞きました。

今込 酸が入ってメッキが黒ずむなんてことがまずありませんね。

——抜差管に塗ったグリスがはみ出さないよう、抜差管に溝を掘ってあるとか？

栗田 ここに少し段差があるでしょ？(写真左) 普通、グリスを塗って差し込むとグリスがベチャつとはみ出て来るんですが、普通につける分にはそうしたことがないんです。スライド外管の入り口にも段差があつて(写真右、これがあると、スライド(内管)を差し込む時に、一度この段差に当たって差し込めるから入れやすい。また入り口に隙間があると、水を差したときも垂れて来ないし、スライドクリームも入りやすい。そうした細かな配慮もあるんです。

——黄ベルと赤ベルから選べますが。

栗田 これは全く好みの問題です。僕は赤の方が柔らかく、艶っぽく感じる。

今込 僕も赤ベルを選びました。あまり息圧をかけなくても

音が拡がってくれる感じがあるのと、あとは、やはり音の艶やかさですね。音が濃い感じがします。

栗田 音がまとまる感じは黄色の方があがる気がする。

今込 僕はなぜか、赤の方が音がまとまる感じがしたんです。人によって息の圧力が違うので、感じ方が違うかも知れません。黄色はすごく吹きやすいですね。

——バックと比べて抵抗感は？

今込 バックの基本モデルと比べるとより少ないと思います。バック42Bのオープンラップと比べても、ウィルソンの方が赤も黄もスーッと息が入る。

栗田 ウィルソンも、形から言えばオープンラップですからね。赤か黄かというのは本当に好みの問題で、いろんな人たちに吹かせると「黄色の方が好きだ」という人は結構います。

 **マウスピースで微調整**

栗田 ただ楽器というものは経験を重ねて

# 「楽器に対するイメージが出来てきたら、 今度はマウスピースをどう組み合わせるかが 面白くなってきた」(栗田)



栗田さんが選んだモデルは赤ベル。N響の同僚たちには黄ベルを好む人が多かったという。

行くと、だんだん道具に過ぎないというところが分かって来ます。若いうちはいろんな楽器を吹いてみたいし、実際いろんな楽器にトライするんですが、そのうち、こう吹けばこういう音が出るというのが分かってくる。そうなったとき、本質的に音を微妙な違いを感じるようになるのは、楽器よりもマウスピースなんです。

——今でもマウスピースをいろいろ試していらっしやる？

いろいろな「分析」しています。合う合わないかはその人にとっての問題ですが、うではなく、データとして、どうすればどうなるかという分析の話。30〜40個は試したんじゃないかな(笑)。

要は、カップを深くすれば音は太くなる、浅くすれば音は細くなる、という単純な理屈から始まり、金属の質量を多く、軽く、厚くすれば音はきつめになり、質量を減らし、薄くすれば音は軽めになるとか、スロートの大きさやバックボアの拡がり

方では音はどう変わるかと、外形によってどう変わるかと。もちろん楽器を変えれば音は全然違うものになる。でも、楽器がこれと決まったら、マウスピースをどういじるかによって微調整がかなり利くんです。ですから、生徒の音を聴けば、このマウスピースにすればどう変わるか、というのが大体分かります。相談を受けたとき以外、マウスピースにはあまり触れないようにしていますけどね。

——今使っているっしやるマウスピースは？

栗田 拜藤さんが作ってくれた5GSくらいのタイプ。同じカップでも金属を多く付けるのと、薄く削ぎ落とすのでは全然違います。僕のは薄い方。浅めのカップには金属が多めの方が合う気がします。深くしていくに従って

て金属を落とすという方が、僕には合うと思う。それも好みですけども。

今迄 僕はアンサンブルや録音の仕事ではバックの5GSが基本で、オケの仕事では最近グレイゴのアレッシェICという、バックの2Gよりもリム内径が大きいものを使ったりしています。音量が簡単に出て、ウイルソンだとこんな大きなマウスピースでもちゃんと音が出るんですよ。

栗田 僕も3Gくらいまで大きいものを使ったことがある。もつとも、オケの仕事はハーモニの一員になることだから、相手にもよるわけだけど。



## ドツポにはまらないために

——マウスピースの分析で得た知見を何か一つ紹介して頂けませんか。

栗田 若いうちはマウスピースで悩むんですよ。わりと多いのは、「高い音が出ないからカップを小さくした」という例。そこにあるレベルに行くと、今度は「音を太くしたい」と思うようになり、結果としてマウスピースを大きくしていく。すると息がどんどん入るようになります。息を入れられるということは、大きい音も出るし、音も太くなる。さらに決定的なのは、音の安定感です。息を入れられると音が安定して来るとは、

息があまり入らない小さなマウスピースでピアニシモを吹こうとすると、音が不安定になりやすい。入り口を大きくすると、息が入ってピアニシモがふらつきにくくなる。安心して吹ける



今込さんも師匠の栗田さんと同じ赤ベルを愛用している。

ようになるわけです。

問題は、それで上手にコントロールできるか、ということです。バランスの限界を超える音程が定まらなくなり、音を外したりする。そうした不具合が出ない範囲で、どこまで大きくできるか。

これは良し・悪し、合う・合わないの問題とは別に、間違いなくそうした変化があるということ。そのへんを上手にコントロール出来るようになると、世界が変わって来ます。意味もなく悩んでいる子が、それでスパッと解決した例がたくさんありました。僕自身もそうでしたけど、マウスピースを変えた瞬間、もう一瞬でぱっと変わるんですよ。

ただ注意すべきは、若い時に理屈を分かんずに試すと悩みの種になる、ということ

です。悩み始めるとトツポにはまって最悪になる。どっちがいいか分からなくなるんですね。変えた瞬間に良くなったと思っても、5分も経つともう分からなくなる。楽器の試奏でも同じですよ。吹いているうちに、数分で身体がそつちに変わって行きますから。

今込 そのマウスピースで練習しちゃう(笑)。

栗田 そう。若いうちはマウスピースをあまり変えない方がいいです。私も怖くて変えられなかった。楽器はコロコロ変えてましたけど、マウスピースは絶対に変えなかつた。変えたのは40くらいになってからです。このままマウスピースのことを何も知らずに終わるのは嫌だと思い、危険を覚悟で試すようになった。楽器は、それこそ半年くらいごとに変えてましたね。東京トロンボーンカルテットでも毎年のように変えていた。XOトロンボーン・ケアルテットをやり出した頃から「そろそろいいか」と思ってマウスピースを研究し出したら、まあこれが面白くて(笑)。

今込 僕は去年の年末、オケの「くるみ割り人形」の仕事で初めて大きいマウスピースを試してみたんですが、全く問題なかったどころか、「自分がこんな音出せるんだ」とビックリしました。

栗田 分かっていて変えるのは全然問題ないんですよ。薬にもする思いで変えるといけない。

——そんな経験は？

今込 マウスピースではありませんが、学

「本番で一番きついのはトロンボーンカルテット。ウィルソンだと息がスツと入り、他の楽器とは違う楽さを感じます」(今込)

生時代に、トロンボーンをどうやって吹けばいいか分からなくなった時期があります。

栗田 それは誰にでもあるんですよ。

今込 後で分かったんですが、吹き過ぎたんです。吹き過ぎは良くないです。限界も分からずに1日中吹くというのは。

栗田 バテているのに、バテた感触がないのが問題。

今込 それを経験したら、こうやって吹き続けたら音が出なくなるといのが分かるようになった。カルテット(トロンボーン・ケアルテット・クラール)の練習でも、「あ、これ以上やったら音が出なくなる」と分かるので、焦らなくなりました。

栗田 それは大きいね。人間、焦っちゃいますからね。真面目な人ほど焦る。音が出なくなるのが分かっていけば、絶対に同じことをやっちゃ駄目です。吹けなくなったら元も子もなくなりますから。

——そうした状況で、楽に感じる楽器としないで感じる楽器があるでしょうね。

今込 僕が普段やる本番の中ではトロンボーン・カルテットが一番きついんですが、ウィルソンだと息がスツと入って他の楽器とは違う楽さを感じます。

栗田 今込君はこの楽器が一番合ってますよ。今までで一番良い音がしているもの。それにしても、この前聴いたクラールのコンサート(2021年10月の第11回定期演奏会)は素晴らしかった。

——定期演奏会は毎年やられている？

今込 毎年1回続けていて、今年は12月に

やります(12月2日豊洲文化センター、12月4日ドルチェ・アートホール(SAKA))。

栗田 完成度の高さがすごいですよ。ちょっと次元が違った。

——今込さんはジャズや現代音楽までカバールされてますよね。

栗田 N響でNHKの番組に出たとき、ジャズバンドの中に彼がいて驚いたことがあった。こっちはただブーと吹いているのに、彼はブーと吹きまくって……

今込 すみません(笑)。でも、何でも出来ちゃうんですよ、この楽器だと(笑)。

